

間もなくソ連軍の進駐となり、強盗、暴虐等の巷と  
なつた。妻をおそうソ連軍兵士に抵抗する男はたちま  
ち自動小銃で沈黙させられる。

私は、武岡総務部長と共に奥地から引き揚げてくる  
職員家族への世話ごとに追われている。とある日、ソ  
連のゲーペーウの馬車がきて、霜のおりる十一月、貨  
車に詰め込まれてシベリア送りとなつた。七日間ぐら  
いたつた夕方、雪野が原に全員下車させられた。収容  
所は第五ラーゲルと呼ばれたところに、半年も経つた  
ろうか、一千人のうち二百人ぐらい死没した。こうし  
た星霜五年間、石炭掘りの死に生きの生活、正にこの  
世の地獄である、鬼気せまるものがある。寝台の友だ  
ちのパンを盗んで吊し上げられる者、元参謀肩章をさ  
げた人が炊事場の溝の中から黒くなつた小指ほどの馬  
鈴箸を拾つていたなどという哀話は山ほどある。

こんな食事では到底まともにも働けるものでない、ま  
して重労働中の重労働の炭砒作業である。

紆余曲折は省略する。

五年間の苦役の疲れを肩にして、習志野に住むわが

家族のもとに帰つた。七十五歳の父と、六十三歳の母、  
軍需工場通いで足をとばしてしまつた末弟、長女を頭  
に三人の子が（二女は病で千葉県一の宮療養所に、妻  
は進駐軍のメイドとして基地にいた）食うや食わずで  
待つていたのである。

さあ、これからこの家族を抱えて、舞鶴でもらつた、  
千円札一枚を握つて生きてゆかねばならなかつたので  
ある。ときに私は私は四十歳であつた。

## 海外居住の動機と私の家族

神奈川県 三 橋 博

昭和十五年四月下旬、单身渡満し、満州土建公社に  
就職、半年後、妻と次男、三男を呼び寄せて、首都新  
京に生活の本拠をかまへ希望に満ちていた。

昭和十七年頃より公社の休日ごとに在郷軍人の教練  
が激しくなつた。職場にも赤紙召集がくるようになって  
た。

昭和二十年八月九日、ラジオでソ満国境は戦争状態と放送があり、その数日後には、ソ連軍の戦車が新京に入城した。

要員以外、日本籍住民は南満に退避するようにと隣組を通じての命令である。

私は鞍山製鉄所爆撃被災情況調査に出張中敵機來襲の報で鞍山市外の山に避難した。

帰宅早々、妻子三人と職員家族三十余人、大暴風雨中を新京駅に見送り、駅頭で生きて再会不可能と思ひ、涙で親子の水盃での別れである。雨水の溜った無蓋車に手荷物ですしづめにさせられ、闇の中に消え去ってゆくのを断腸の思いで見送った。

そのあと、私に赤紙の収集令状がきた。木銃と空瓶を携行して入隊したが三八銃の所持兵は全隊の割ぐらいであり、これでソ連兵と戦えるかと不安を感じた。

翌朝、隊長命により空瓶を持って戦車への飛びこみ方の教練をうけた。戦車防碎壕の掘削作業をスコップで始めた。八月十五日終戦となり召集解除となって自宅に戻った。

同夜、満州軍反乱、來襲のため、日本人は市内の高女校庭に急集するようにとのこと、校庭内は混乱したが、日本軍がようやく敵軍を撃退し、命からがら自宅にたどり着いた。

明けて翌朝、日本人の姿は街に皆無であり、現地人は肩をいからし、中にはこん棒をふりまわし、関東軍倉庫、役所、日本人宅を襲撃して廻っていた。

現地人は日本人官舎や一般個人宅などを急襲し、手当りしだい機具、生活用品、食料品などを略奪した。

ソ連軍入城までつづいたが、更に現地人はソ連軍の道先案内をして掠奪した。

新京に入城した先遣戦闘兵は、蒙古らしいアジア人種が多く、服装は泥砂などで汚れ、あたかもどぶねずみの様子であった。

武器などの隠匿に対する検索と称し、満人を先導に数人が銃先で扉をたたき、応じない場合は破って侵入し、略奪、暴行をうけた。

ある日、仲間と晩酌を共にし、たそがれ時帰宅途中、二人組のソ連兵に襲われたので、こん身の力をしぼっ

てつきとばした。彼らも酔っていたのか、街路樹の下にたおれたので一目散に闇の中に逃げたが、後方より銃声があり、命拾いしたこともあった。

疎開した妻子達の居住地を、親しかった韓国人から聞き出し、私は中国人に変装し、日本人乗車禁止の南行列車に、真夜中潜入乗車したが、途中野原に臨時停車し、襲撃する匪賊と銃撃戦を繰り返しつつ四日四晩がかりで安東街にたどりついた。

中国人の時計店の二階に仮宿していた妻は、昭和十九年新京生れの四男が栄養失調で瀕死の状態となり、ソ連将校と単身で乗車交渉し、職員家族十人余を引き連れて一昨日、新京に帰ったとのことである。私は啞然としたが、夜半、北滿行きの列車の屋根上に乗って北行途中、奉天駅構内では、素っ裸の日本兵が数両の列車に詰めこまれていた。

駅前広場には日本人の死体が現地人の暴民にかまわれていた。

私も大勢の暴民にかまわれたので闇に乗り、側道建築現場下にかくれ、駅にたどりつき再び列車屋根上に

乗り、新京駅手前の畑の中に飛びおり、家にたどりついた。奇しくも妻と再会し共々に感激の涙である。幸い四男は元気だった。同行した隣家の女兒数人がみな栄養失調で死亡したのである。

新京の空家は南下してきた難民でいっぱいであった。

ソ連兵は、日本人を強制使役し、満州国内の軍事施設、工場施設、機械などを解体し、列車に満載して半年がかりでソ連領土に運んだ。その使役に私も駆り出され悲憤の涙を流した。

妻は零下四十度ぐらいの酷寒に道端に麦わらを敷き、満一歳の四男を背負い、「あんこ巻」を道行く人に売って生活を支え、引揚げの日の早からんことを待ち続けた。